



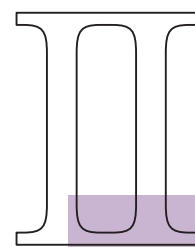
調査資料 第262号
ISSN 0285-6891



私学らしい
個性的な探究・
プロジェクト

私学教育の グランドデザイン

Grand Design of Private School Education



令和8(2026)年3月

一般財団法人 日本私学教育研究所
The Education Institute for Private Schools in Japan

多様な個性が創る地域とのつながり

英明高等学校

ーコースの個性を生かした社会貢献ー 英明高等学校の探究

英明高等学校教頭 三枝直幹

1. 英明高等学校の特色

英明高等学校(香川県高松市)は1917年に私立明善高等女学校として創立され、2001年に校名を英明高等学校に改称して男女共学化しました。施設面では2009年に11階建の教室棟「英明タワー」を整備。全日制課程普通科に特別進学・進学・情報・総合・ワンステップコース(ワンステップコースは2021年より)の5コースを置き、総合コースは2年次から総合進学、福祉、保育、食物調理、音楽、美術デザイン、スポーツ科学、観光、商業の9つの系が選択できるようになっています。2025年には通信制課程も併設しました。部活動も盛んで野球や女子バスケット、陸上、バドミントン、テニス、バレーボールなど全国レベルで活躍している部もあります。

生徒の多様な興味や個性に応じて最適な学びを提案し、部活動、学校行事などさまざまなところで生徒の「選択の自由」があるのが英明高校の大きな特色です。

2. 探究の本格始動

総合的な探究の時間が始まった当時、学年で共通のテーマを決め担任がクラスごとに生徒を指導することにしましたが、探究という主体的な学びの理解が教員ごとに異なっており、学校全体としてうまく進行していませんでした。ちょうどその時、広石先生とご縁ができ、2023年3月、2024年2月の2回、先生を高松にお呼びしてPBL(Project Based Learning)に関する講演とワークショップを開き、全教員が参加することで、探究という学びの共通認識と探究へ取り組む心構えや指導法を向上させることができました。

現在、探究の時間は5つのコース別、うち総合コースでは9つの系別に分けて授業をしています。テーマは各コース・系で設定しており、授業担当者については、特進、進学、ワンステップコースは学級担任、情報、総合コースはコース・系の授業担当者としています。(広石先生との出会いは現教務主任吉田左江が日本私学教育研究所主催中堅教員研修会で先生の講演を聞いたことでした。その詳細や本校での講演の話、2023年度以前の本校の状況、2023年度の探究の時間の取り組みについては、広石先生編著『PBL×探究』(2025年)に掲載されているので、ぜひそちらをお読みください。)

本校には、多様なコース(5つのコース)があり、さらに総合コースには9つの系があり、生徒の個性や生徒の興味関心を尊重した学びの機会を提供しています。現在では、各コース、各系で多様な探究やプロジェクトが展開されており、全てを紹介することは紙面の関係でできませんので、今回は、その中でも総合コース福祉系(以下、福祉系)と美術デザイン系(以下、美術系)の取り組みを例として本校の探究の特色を紹介します。

3. 2つの系の探究・プロジェクトの事例

本校の探究への本格的な取り組みは、まだ始まったばかりであり、現段階では建学の精神やスクール・ポリシーと探究の時間の目的が一貫しているとは言い難い状況です。ただし、本校には、西本泰三校長が提案したキャッチフレーズ「Chance! Challenge to Change」があり、教員も生徒も失敗を恐れず探究に「チャレンジ」しています。広石先生の講演でも「探究やプロジェクトは失敗することがよくある」「失敗から学ぶことが大切」というお話を聞き、私たちは、探究の活動において失敗を恐れずにチャレンジするようになりました。また、以前は校外に行くことや、外部の方の力を借りることをためらっていましたが、今では以前に比べ、ためらうことなく積極的に地域の様々な機関や人々との連携を試みる教員が増えています。

探究のテーマは、系の特色を活かすために系ごとに異なっており、例えば、福祉系の2025年度3年生のテーマは3つあり、そのうちの1つが「にこちゃんかふえ」(高校生による認知症カフェの運営)でした。

カフェの名前は2024年度の3年生が命名し、後輩たちがそれを引き継いでいますが、名前の理由は「参加者だけでなくスタッフのみんなもニコニコ笑顔のたえない空間を作れるよう、終わったあとも来てよかったと思ってもらいたい」とのことです(生徒作成スライドより引用)。

2023年度の年度途中に、福祉系担当教員が認知症カフェを開きたいと校長に相談したことがきっかけで、校長が認知症カフェを運営している方を福祉系担当教員に紹介し現場見学を行った上で、福祉系担当教員が「探究の時間に認知症カフェについて調べカフェを開こう！」と生徒に提案して、生徒の賛同のもとに始まりました。福祉系担当教員が生徒と一体となって取り組んできたこの活動は、すでに2年経過したことになります。担当教員の思いとしては、福祉を学ぶことができる学校は本校以外にもあるが、他校と異なる「実体験の機会」を設けることで差別化を図りたい、福祉の資格を取ることはできないが、本校の福祉系で学ぶことで「独自の経験ができる機会」を作りたかった、とのこと。認知症カフェを運営するために、校内外でコラボしてくれるところを探し、コラボ先と打ち合わせを重ねて、2025年9月の英明祭(文化祭)で実施となりました。

一方、美術系の2025年度3年生のテーマは「地域社会と連携した美術・デザインによる社会貢献」です。香川県障害福祉課からの依頼を受け、3年に1度開催される「香川県障害者芸術祭」に系として協力し、本校が作品展会場のファサード(外観装飾)制作を担当しました。実は3年前にも同様の依頼が本校にあり、「キラリちゃん」というマスコットのオブジェを制作したことがありました。美術系の教員が県の担当者と話し合い、芸術祭の趣旨である「障害のある方々の表現活動の発表と交流の促進」に賛同し、多くの生徒の主体的な参加のもとで、来場者が親し

みやすく心温まる空間を感じられるようなデザインをめざしてプロジェクトが行われました。

4. 英明の探究・プロジェクトの特色

福祉系は「高齢者×福祉×地域貢献」というテーマ(視点)でプロジェクトに取り組んでいます。認知症カフェ「にこちゃんかふえ」運営では、福祉系の生徒の様々な声を丁寧に聞き取ることを大切にしています。「高校生は認知症の人たちと触れあう機会が少ないので、少しでも認知症の人たちと触れあって、認知症に興味を持ってもらいたい」「身近に認知症の人がいても関わり方が分からない人が多いと思う。また、正しい知識を持ってから接してほしいと思うので、認知症について理解する1つのきっかけとしたい」「普段触れあう機会があまりない人と交流することでよい刺激・影響となしてほしい」(生徒提案書より引用)と、このプロジェクトの経験を通じて、生徒たちが身近で具体的に自分ごと(他生徒への認知症の理解促進)として目的を考えている点は、生徒の成長(変容)を確かに感じることができそうです。

美術系は「美術×地域連携」という視点でプロジェクトに取り組んでいます。一般的に、美術作品の制作は、製作者個人の自己満足で終わることが多いのですが、今回、彼ら・彼女らが取り組んだファサード制作では、生徒たちが自分たちだけの満足で終わらないよう、外部にも協力を要請したことが特徴といえます。協力の具体的なお願いについては後述します。

5. 学外との交流、連携、協働

福祉系の2025年度3年生は「にこちゃんかふえ」運営にあたって、2年生の3学期から少しずつ準備に取り組みました。1月には、福山平成大学の先生をお招きし「高校で認知症カフェを開きませんか」という出張授業を受けました。2月、8月、9月には、生徒たちは、高松市内で複

多様な個性が創る地域とのつながり

英明高等学校

数の認知症カフェに現場見学に伺い、2月に生徒は高松市の支援で認知症サポーター養成講座を受講しました。(高松市にお願いして資格を持つ講師の方に来てもらっています。認知症について正しく理解し、地域や職場で本人や家族をさりげなく支える人「認知症サポーター」を育てる講座で、カフェを開くにあたって身につけておく知識、意識の向上のために受講しています。)

また、協力してくれる卒業生(特に福祉分野の専門学校に進学している者)にも教員から呼びかけ、経験と専門性を兼ね備えた先輩に来てもらうことで、生徒のプロジェクトへの取り組みを支援してもらうことで、生徒の安心感を増やしています。高松市地域包括支援センターにも相談し、英明祭当日において生徒のサポートが可能な認知症カフェを探していただきました。夏休みには、高松市地域包括支援センター、認知症カフェのスタッフ、本校教員で打ち合わせを行った上で、英明祭直前に認知症カフェのスタッフ、生徒、教員で打ち合わせを行い、生徒が構想しているカフェのイベント内容や生徒の思いを関係者全員で共有することができました。

一方、美術系は2024年11月に香川県障害福祉課より、美術系担当教員を通じて、ファサードの制作依頼を受けました。香川県障害福祉課、本校教員、運営担当者(障害福祉サービス事業所)で2回打ち合わせを行い、その協議内容を生徒に伝えました。依頼内容を聞いた生徒はデザインの案を1から考えつつ、(生徒に主体性を持たせるために)生徒のグループの中にイベント運営会社に見立てた組織を編成し、社長・副社長をはじめ、企画部・デザイン部・制作部など役割を分担しました。



美術系 3回目の打ち合わせの様子

生徒も含め香川県障害福祉課、障害福祉サービス事業

所と3回の打ち合わせを行い、意見交換を通して作品のアイデアやスケジュール、安全性などを関係者全員で真剣に議論しました。また生徒は、ファサードを設置する現地(サンポート高松)を見学し、設置場所を確認し、生徒なりにイメージを膨らませていきました。生徒たちは話し合いを重ね5月にはファサードのデザイン案を決定しました。生徒のアイデアで、県を通じて特別支援学校の生徒に「好きなもの・こと」をポストカードに描いてもらい、集めたカードをファサードに貼り付ける、という内容の協力を依頼しました。カードは約720枚集まり、実際にファサードに貼り付けることができました。また、一部生徒は障害者施設を訪問して、「ともに過ごす」ことの大切さを実感する機会も得ることができました。



美術系 夏休みの作業の様子

ファサードの外観を作ったのは8月(夏休み)でしたが、3年生の夏休みであり、当然ながら進路のことに集中しなければならない時期でもあるので、美術系の生徒が全員集合ではなく、各自が都合のつく日に集まる交代制を取り、1週間かけてファサードの制作に取り組みました。そして、文字の切り出しや貼り付け作業などの仕上げは9月に生徒全員で行いました。

6. 成果発表とイベントへの参画

探究に関する成果発表については、本校では2年生は全てのコース・系を対象に校内での中間発表会(11月)、期末発表会(3月)を実施しています。聞き手となるのは2年生の一部と1年生全員、教員(教員は期末発表会では全員)です。(本当は2年生全員に発表者として参加させたいところですが、どうしても人前に立てない生徒につい

ては無理をさせず見学させています。)また、イベントなどのプロジェクトに取り組んでいる系やチームは、英明祭で取り組みを掲示する機会を設けています。さらに、一部には外部のコンテストや発表会に参加している生徒もいます。

福祉系では、9月の英明祭に申し込んだ方(地域の方、高齢者の方、他校の教員)に参加してもらい、「にこちゃんかふえ」を運営しました。9月12日(金)は校内でリハーサルを行い、9月13日(土)当日は外部スタッフ7人、卒業生3人、お客様23人が参加しました。チラシは美術系に依頼し、制作してもらったものを高松市地域包括支援センターと体験で行った認知症カフェに事前配付し、SNSも活用して宣伝しました。



福祉系「にこちゃんかふえ」レクリエーションの様子

運営内容としては①総合コーススポーツ科学系が考えた介護予防体操(内容は福祉系から依頼)、②福祉系の考えたレクリエーション、③お茶会などでした。実際のカフェの運営では、福祉系以外の生徒にも協力してもらいました。最後に今回サポートを依頼した認知症カフェ運営者による「認知症について」の講演をしていただき、来場者に認知症について理解を深めてもらいました。



福祉系「にこちゃんかふえ」お茶会の様子

参加した方の感想には、「普段高校生と交流する機会がないからうれしかった。高校生の皆に元気をもらった。御抹茶がおいしかった。色々な種類のレクリエーションがあって楽しめた。高校に入ったのが久しぶりで自分の学生時代が懐かしくなった。色々な年代の方と交流できるカフェでした。生徒の皆さんありがとうございました。」といった多くの感謝と励ましの言葉をいただきました。

協力してくださった認知症カフェのスタッフの感想には、「役割分担もそれぞれが得意とすることを担当されていてすごく良かったと感じました。今回、高校生主催の貴重な認知症カフェに参加できてとても良い経験をさせていただきました。色々な年代での交流ができ、生徒さんたちにたくさんの刺激や元気をもらえるカフェでした。」と、一所懸命に取り組んだ生徒の気持ちが一気に晴れ、確かな達成感を得ることができるお言葉をいただきました。カフェの運営後の現在もなお、福祉系の3年生は次年度の生徒に渡す資料を作成して後輩にうまく引き継ぎができるよう工夫をしている最中です。



美術系 イベント前日のファサード設営の様子

美術系のファサードのプロジェクトは、10月13日(月)イベント当日を迎えました。前日に現場に出向いて生徒6名、教員2名で設営を行い、トラブルもなく設置できました。開会式では3年前の先輩たちが制作したオブジェ「キラリちゃん」も展示されました。(「キラリちゃん」は今ではマスコットキャラクター的存在になっています。)ファサードは作品展示会場入口に置かれ、訪れる多く市民の方々の注目を浴びました。来場者や関係者から「明るく楽しい雰囲気になった。芸術祭にふさわしい装飾だった。」との高い評価をいただきました。生徒たちも夏休みを一部返上して取り組んだプロジェクトが、実際に

多様な個性が創る地域とのつながり

英明高等学校



美術系 イベント当日参加市民の様子

イベントを盛り上げ、多くの市民から高い評価を得たことは、大きな達成感を感じるものとなりました。

7. 私学の強みを活かす探究

探究やプロジェクトを継続的に展開しようとした場合、転動がある公立高校では、引き継ぎが難しいケースがあると思われます。本校ではグループ校がなく転動がないため、3年生の担当者が前年度の2年生と同じであれば2年間継続した内容で探究やプロジェクトを支援することができます。内容を変更するとしても2年次の内容を踏まえた上で次の内容も検討しやすいことは、強みです。福祉系の「にこちゃんかふえ」は2024年度も実施しましたが、2024年度3年生がスケジュールが間延びしすぎたなどの課題を感じ、その振り返りを担当教員を通じて後輩に伝えた上で、2025年度3年生が取り組みました。このように教職員の長期的雇用が前提となる私学では、仮に担当者が変わっても前年度の担当教員が校内にいるため引き継ぎしやすいという強みがあります。

また、探究やプロジェクト活動に必要な資金が発生することがあります。例えば外部リソースの活用でお金がかかる場合、私立学校の場合は、前年度に計画を立てていれば、それを前提に年度をまたいで予算を取っておき、それを活用することができます。このように、予算執行の自由度が高く、生徒や教員がやりたいと思った活動がすぐできることも私立学校ならではの強みです。本校での「総合探究」の時間配当は2年生で2時間連続としているので授業時間内に大きく動ける利点もあります。学校の

近くの施設であればすぐに行けますし、少し遠方でもスクールバスを使ってすぐに行くことができます。このような大胆なカリキュラムが組めるのも、校長をトップとして、意思統一をはかりやすい私立学校ならではの強みとされています。教員・生徒の主体的な活動を促進できるところが私学の強みと考えられます。

8. 生徒の成長

このような学外の様々な方々と連携して、大きなプロジェクトに取り組んだ生徒の成長(変容)に触れます。

福祉系の教員は、認知症カフェの企画・運営をやり遂げた生徒の変化について「外部の方とも臆せず関わりができるようになった。生徒同士で完結するのではなく外部に向けて実践することが目標となり、達成感ややりがいを感じる生徒が増えた。」とコメントしています。生徒の感想には「参加者が楽しかったと言いながら帰ってもらえたのが良かった。最初は緊張していた参加者も体操やレクをしているうちに自然と笑っていて良かった。お茶会のときには、お菓子などを食べながらみんなでゆっくりと話して、いろいろなことを知ることができ、意見を共有できて、スタッフ・参加者が楽しんでたくさんコミュニケーションを取ることができて良かった。」と、自分たちが主体的に取り組んだプロジェクトでの様々な実体験をその達成感とともに振り返っています。

美術系の教員は、ファサードの作成と設営に取り組んだ生徒の変化について「生徒は実際の依頼に応えるデザイン制作の責任と達成感を体験することができました。また、限られた時間と資源の中で協力し合うことの重要性、デザインが社会や人の心に与える影響の大きさを実感することができたようです。」とコメントしています。生徒の実体験を通じた「心の成長」を教師がしっかりと感じ取っている様子が見えます。

他のコース・系でも、様々な探究やプロジェクトの取り組みをしています。全てを記載することはできないので、他の担当教員コメントを参考までに記します。

・「外部の方と関わることによって、積極的な行動や相

手を思いやった行動を取ることができた生徒がいる。幼稚園や保育所への訪問で、子どもに配慮して行動したり、先生方のことを考えて内容を扱うことができるようになったりと意外性があった。」

(特別進学コース担当教員)

・「普通学校になかなか登校できていない生徒で、特に人前で全く話せなさそうな生徒が発表会で堂々と発表している姿は感動すら覚える。」

(ワンステップコース担当教員)

・「プレゼンテーションアプリ(Google スライド、Canva など)を使用する力が向上した。生徒同士で教え合い非常に優れたデザインをし、目を引くスライドを作成できるようになる生徒もいる。動画をうまく活用する生徒も出てきている。」

(複数の教員のコメント)

9. 教員の変容

では、探究やプロジェクトに本格的に取り組んだ教員の変化(変容)はどうでしょうか。元々探究の時間とは何かなど、学校全体として理解が足りていなかったところを、広石先生との出会いがきっかけとなり、2度も来校していただき講演いただきました。振り返ってみると、教員全体で受けたFD(Faculty Development)講演によって学校全体が探究の時間への理解が進んだことが非常に大きかったと思います。教員の意識の共有は、私立学校こそ大切であり、改めて学校全体での研修の重要性を感じています。

今では、一部の教員は外部との連携に躊躇しなくなりました。自分で頼めることについては自分で頼み、何もつてがなければ、他の教員にどこか協力してくれる方がいないか聞いています。福祉系はゼロからのスタートでしたが、現在は、活動の広がりを通じて市や高齢者施設などのつながりができています。探究の時間を何回か担当すると前年度の反省を次年度に生かそうとするPDCAサイクル的な発想を自然と教員ができるようになっていようです。福祉系の「にこちゃんかふえ」の取り組みはその

好例といえるでしょう。

10. 英明の探究のこれから

英明の探究・プロジェクトは、始まったばかりです。これからの本校の探究学習の方向性や課題について最後に触れておきます。

福祉系では現在の「高齢者」「地域」に関するプロジェクトに加え「障害」分野にもその活動を広げていきたいと考えています。また障害者施設等と連携し、共同で商品開発や交流活動にも取り組んでいく計画です。

美術系では地域との連携を通して生徒がデザインの社会的役割を考え成長できる機会(プロジェクト)を継続的に続けて行けたらと考えています。担当教員も社会課題を視野に入れながら、創造力と実践力を兼ね備えたデザイン教育を推進したいと考えています。

他のコース・系も含めた今後の本校の探究・プロジェクトに関する課題を考えてみました。次期学習指導要領の改訂に当たって、各教科科目も含め「探究」がどれだけ盛り込まれるか気になるところです。生徒が力を入れれば入れるほど、活動自体は面白くなりますが、当然ながら、教員の負担も増えることとなります。他校からも、放課後や土曜日を活用した活動が、幅広くなればなるほど教員の負担が増え大変になる、と聞いています。この対策としては、夏休みをうまく活用した活動が考えられます。本校でも夏休みに美術系のファサード制作以外に他のコース・系でも保育所訪問、子育て団体との交流などを行っています(ただし夏休みに時間があるからといって力を入れすぎると教員の負担が増えてしまいます)。

本校では、探究の時間は、2年次に2単位、3年次に1単位を設定しています。2年次に2単位設定している理由の1つが、2時間連続にすると校外に行きやすく、外部と連携しやすいからです。一方でデメリットもあり、2年次年度当初に決めたテーマでは、探究的な活動が1年間持たないグループが出てきます。テーマを決めるときに探究できる内容かどうか、年間探究を続けられるテーマかどうかをよく考えて決める(教員としてはサポートす

多様な個性が創る地域とのつながり

英明高等学校

る)必要があると考えています。各学年で探究の時間を1単位ずつにするのか、ある学年で2単位にするかは、各学校で何を目的とした探究なのかよく考えて単位数を設定することが重要だと考えます。

また、テーマを決める際に、生徒が個人あるいはグループで好きに決めてしまうと、どうしても迷走する生徒・グループがでてきます。福祉系では「高齢者×福祉×地域貢献」という視点で取り組んでうまくいっていますので、ある程度条件(探究の範囲)を設けてテーマを決めさせると生徒は、迷走しにくくなると思います。

現在、本校はコースや系に分かれて探究の時間を実施しています。系の間でコラボできそうなテーマもあるので、協働できたらよりよい活動に至りそうなところがあります。福祉系が「にこちゃんかふえ」で他の系に協力を依頼してうまくいったことがその実例の1つです。

本校では2年次に中間、期末発表会をしています。そこに外部の方々(お世話になったの方々)に来ていただき、評価していただく機会があれば生徒も色々な意見をもらえてモチベーションもあがると考えています。美術系のファサードは多くの方に評価をもらえたことが、生徒の達成感につながったと考えています。

また、コンテストや探究の大会を目標にした場合、応募締め切り日や大会実施日が年度途中だと、一旦そこで活動がクローズとなり、その後の探究の時間でテーマを変えるなどの必要が出てきます。福祉系も美術系もイベントは一旦終了となったので、その後の活動をどうするかをあらかじめ検討しておく必要があると感じています。

本校の探究への本格的な取り組みは3年目であり、畑で例えると荒野を耕し、種をまき、一部が芽を出した状態という感じで、まだまだ工夫改善できる場所は多々あると考えています。

探究においては自由にチャレンジできる雰囲気を大事にしつつ、教員も生徒も失敗を恐れず探究を進めていきたいと思います。また、多くのコース・系が存在しているため、本校には、様々な分野の教員がいます。校内でも協力できそうなところは協力して進めていくと、もっと素晴らしい探究の時間になっていくのではないかと考えて

います。

終わりに、この記事は福祉系担当教員の渡瀬リク、美術デザイン系担当教員の前堀浩二・秋山真吾の協力を得て作りました。3人の先生に感謝申し上げます。

インタビューと解説

私(広石)は、昨年の11月に英明高等学校(以下「英明高校」と表記)の探究の今を確認するために高松市にある同校に三度目となる訪問調査を行いました。丸1日かけた関係者のインタビューは、かなり濃密なものでした。その一部を紹介します。

三枝教頭の説明文にあるように、日本私学教育研究所の主催する中堅教員研修会に吉田教務主任が参加(2022年)されたことがきっかけで、その後、西本校長の熱心な依頼で、私は英明高校の先生方に「探究・プロジェクト」の講演を2回行っています。その意味で、英明高校の探究の今に多少の責任を持っている立場といえるでしょう。



左から三枝教頭、西本校長、吉田教務主任

当日は、朝から3人の先生(西本校長、三枝教頭、吉田教務主任)に英明高校の探究の現状をお聞きするとともに、昼食を挟んで夕方まで全ての系で行われている総合探究の様子を見学させていただき、多くの生徒さんと直に話す機会をいただきました。

様々な私立学校を訪問している私にとって、英明高校の教育で特筆すべきは、「選択の自由を尊重する」姿勢です。総合コース(2年生は全9クラス)の生徒は、特徴の異なる9つの系(探究と特徴的授業は系単位で実施され、教科授業は、各系の生徒を合同させたクラス単位で実施)のカリキュラムを選択できるように工夫されていました。

そのため系単位の人数はバラバラで、クラスの雰囲気も系ごとに大きく異なり、探究の活動内容も系のカリキュラムと深く関連するものが行われていました。

例えば、人気の高いスポーツ科学系には生徒が多く在籍する一方、個性的な生徒が集まっている美術デザイン系、さらにごく少数の生徒が集う音楽系など、人数の多寡に関わらず生徒の「選択の自由」を徹底的に尊重されていました。(生徒もそうですが私の印象では、何より系を指導されている先生方が、芸術家や音楽家といった風貌で、とても個性的な方々ばかりでした。)校長曰く、「本校は生徒の選択を尊重する方針をどんなに大変でも守り通しています」と笑って説明されていました。

西本校長へのインタビューでは、「丁度前日に、県内の家庭科の先生方の集まりが英明であり、総合コース保育系の生徒が、子育て中のお母さん方と交流するプロジェクトで創作したおもちゃや段ボールの滑り台などの実演とプレゼンを行い、それを聞かれた公立高校の先生方は、私立高校ではこんなことができるのですか!と一様に驚かされていました。認知症カフェでは、福祉関係で働いている先輩が、文化祭に戻ってきて後輩にアドバイスや励ましの言葉をかけてくれていました。」などと嬉しそうに話されていました。また「英明高校では、以前から教員有志が作ったビジョン委員会があり「地域とつながる」という方針を議論し、様々な形で地域とのつながりをずっと模索していたことが、現在の「総合探究」が地域と活発につながった基盤になっています。」とのことでした。

三枝教頭からは、「総合探究の当初は、一部のコースでは、難解なテキストを使うなど試行錯誤を繰り返していましたが、現在では、(探究の導入で標準的テキストを用い生徒の共通理解を図るが)先生方はこの3年で探究という主体的学びの骨格を理解して、それぞれの教員が系の特色や生徒の興味に応じて探究を自由に構想することができるようになってきました」とのことでした。

私から「2年の総合探究が2コマ連続という時間割は、探究の自由度を高め校外での活動を容易にしているようですが、本格的なプロジェクト(例えば未就学児にスポーツの楽しさを実感してもらうスポーツ科学系のプロジェ

クト)の場合は、その時間でも不足するのではないですか?」と質問したところ、「文化祭や県のイベントに合わせるプロジェクトの場合は夏休みに活動を行ったりしています。その他のほとんどは系単位で授業の時間割を教員同士が調整することでなんとかやっています」とのことでした。ここにも多様なコースを持ち、教員の協働性が高い私立高校の良さが活かされていました。



美術系生徒へのインタビュー

午後は、全てのコース・系の総合探究を見学させていただき、生徒へのインタビューもできました。どのコース・系の生徒も皆、自分たちの取り組んだ探究やプロジェクトの意義や様子を明るい顔で語っていたことが印象に残っています。認知症カフェを開いた生徒へのインタビューで「誰でも参加できるレクリエーションをみんなで話し合っって考案し、スポーツ科学系の仲間は、高齢者向けの体操を考案してくれ、茶道部には、参加された高齢者にお茶を点ててもらうなど多くの企画を準備でき、文化祭当日は高齢者の方々が多く楽しく参加されたので、心からほっとした」などの感想が聞けました。

生徒にプロジェクトの前後での意識の変化について聞いたところ、「高齢者の不自由さ、障害者を支えている人たちの大変さに初めて気づいた」「初めのうちはとても緊張していたが、交流している内に高齢者への違和感が消えて自然に話せるようになっていた」など、実体験を通した生徒の心の成長が確認できるものでした。

英明高校の探究は、先生方が生徒の学びの自由を最大限に尊重することで、多様な個性を持つ生徒が主体的に協働し、心を込めて地域や人とつながり、しっかりと地に足をつけて地域社会に貢献している「温かな学び」であることが確信できる訪問となりました。

一般財団法人日本私学教育研究所
調査資料 第262号

私学教育のグランドデザインⅡ

Grand Design of Private School Education

私学らしい個性的な探究・プロジェクト

令和8年3月23日 印刷

令和8年3月30日 発行

発行人 一般財団法人日本私学教育研究所

所長 平方邦行

編著者 広石英記

発行所 一般財団法人日本私学教育研究所
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-3-8
市ヶ谷 UNビル 6階
電話 (03) 3222-1621

印刷・編集 株式会社エデュコン

ISSN 0285-6891

